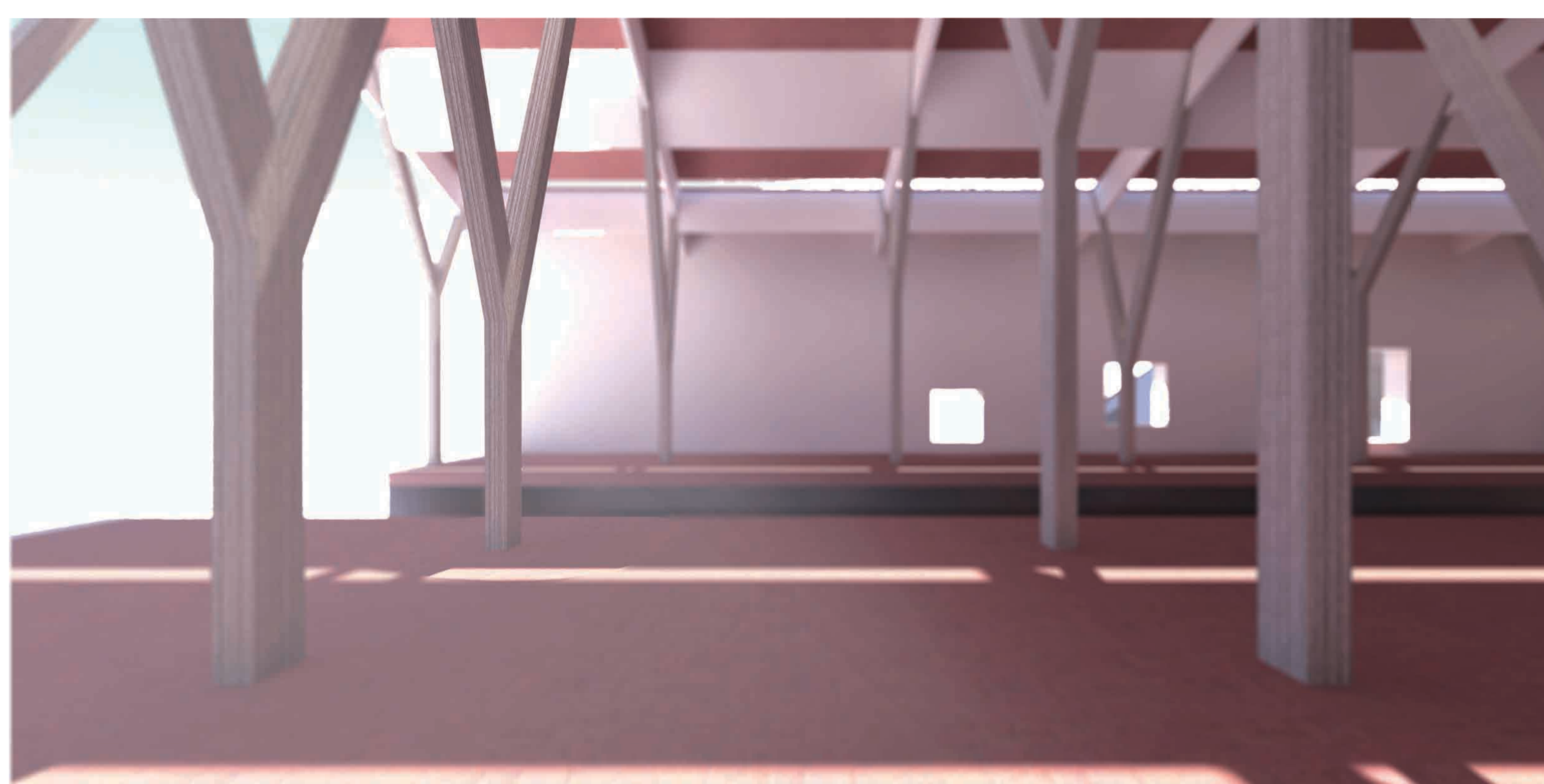




都市の痕跡 或いは化石

—都市の記憶としての駅舎—

駅は街の中心であり、顔である。

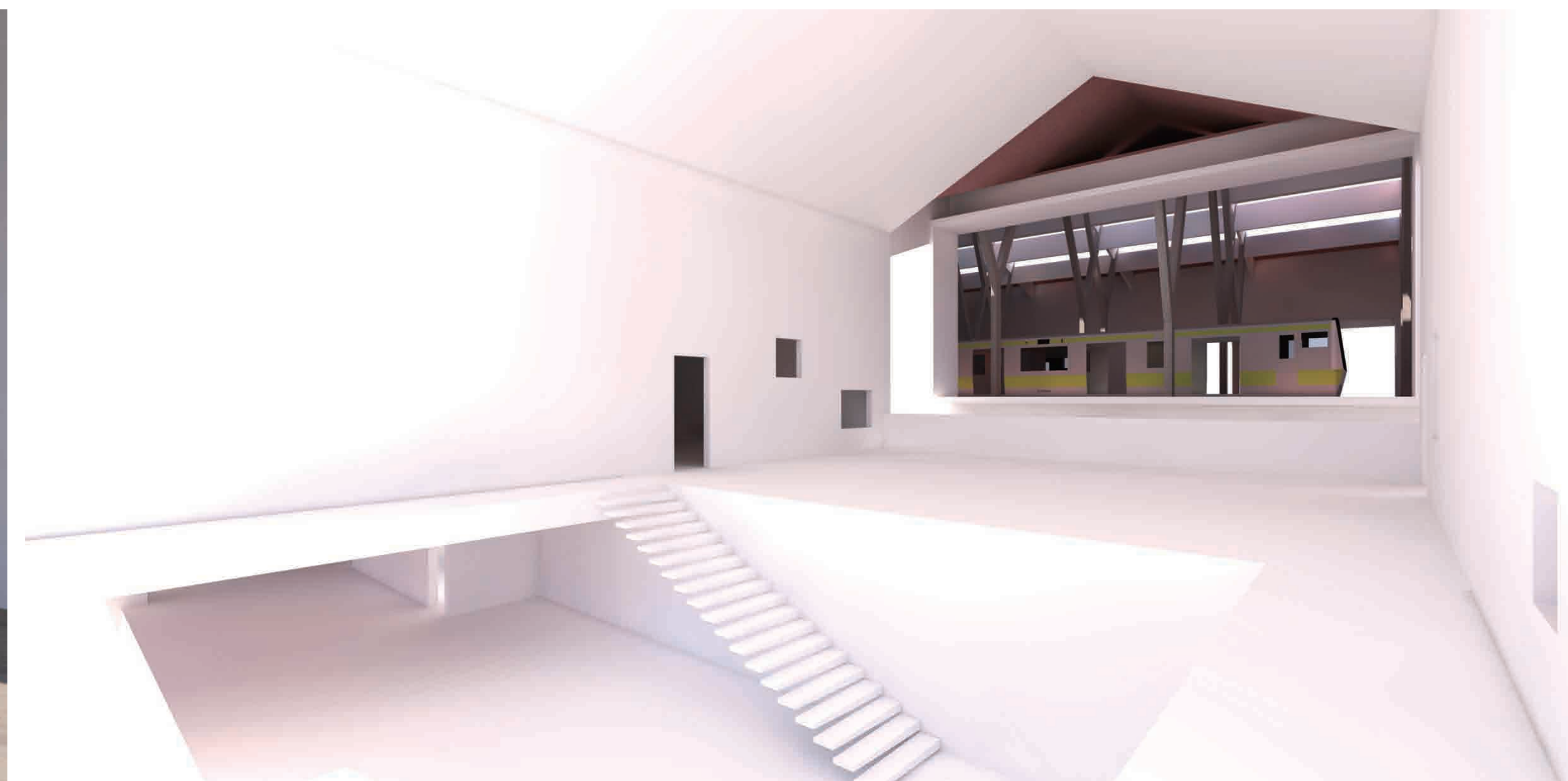
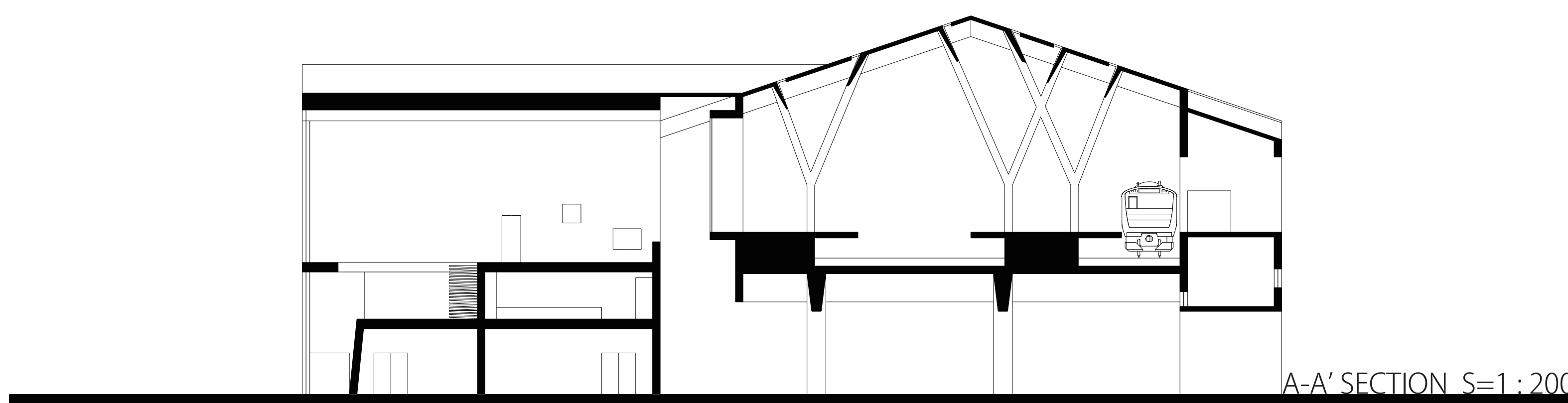
利用する人にも通過する人にもその街の雰囲気を感じ取れるものであるべきだと考える。

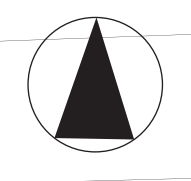
そこで、23 年間住んできたこの街を私小説として言語化し、描写する。

その私小説から街の都市構造・活動・町並み・形態などを駅舎という建築に再構築する。

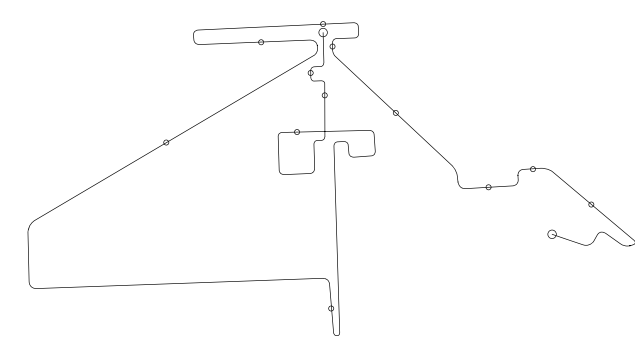
再構築されたそれらは柱や壁、開口といったものに形を変え、街そのものとは違った形で現れてくる。

この駅を利用する人も通過する人も空間体験を通して街とつながっていくことを期待する。





1F PLAN S=1 : 300



りを示す崖が長く続いているのが見えてくる。

その何ともいえない空闊な空間は、かつては、とても透明度の高い塔が立、空間であった。それは匿名な塔であり、名も、特徴も、特にない。どこにいてもある塔である。その塔は匿名で連なっており、まるで山と山尾根が通つて、どこぞの塔が一年前に僕の家の前から消えた。何か大切なものを失つてしまつたかのような感じ、しびれに変わった。この塔は以前、僕の家の子細が一目瞭然となつたために、人々に明する者でも、目印としての利用は出来た。この塔が山に現れると「帰つて来た」という気持ちになる。この塔は細く、反対の少ない金属で構成されてゐた。

《都市の組織 或いは化石 都市の歴史としての私小説》

僕は、二十二年間住み続けたこの街を今日を以て離れる。離れる最後の日に僕はこの街を目に焼き付けたため、とても短い小さな旅をする。この街を巡る旅である。この旅は僕の実家からはまる。そしてこのまま、この街を去るにしよう。

僕の家は、この街の外れにある。はずれといつても、隣の街との見えない境目なだけであって、特にはずれという印象は持たない。家を出て最初目に入るのは、何もないう空を先に見る。

土の壁に顔をくっつけて、垂直に壁を握る。あたかも木曜日のようにしてゐるところ。壁の上には細い道が平行して走っている。この壁に面しているほどよいものは、壁の上と下にあつたの壁までである。どこでも土に登ると、この街を望み得る。この街の終わりを示す崖は、現在に至るまでの長い時間、この街を見つめ終つてきたのだらう。そして、この先の無い未来もずっと見届けにくいくのだらう。

へたまらん坂

る。ここから先は平たい街が続いている。

これはそんなにも特徴的なところではないが、僕小さい頃から毎日のように見えていた景色である。この光を辿ると季節を感じる事が出来る。網を通って見える曜けたところの壁によって季節がはっきりと望まれている。昔は三つ柳も咲いていたのだろう。この真新しい反側の上からは季節を感じることが出来なかった。聞けたところの小さい道へ、友達二人と記憶がある。父とキャッチボールを長したところもここにた。真新しい壁に出来る影は、定期的に人々が集まり、賑わいをさせていたが、今では空っぽの様にもなっているように思えた。

びた通りにぶつかる。

（佐渡の）
この通りには、他ではあまり見られない鋭角のカドが多く存在する。そのカドの多くは、そのものの入口になっている。まるで、カドに隠れているようにである。カドを明かに入り口になつてゐるのだが、入り口の上には鋭角が張られたまゝである。カドであることにすれば、あるのも可變しい。古いアルタの壁が多く目に入る。おそくく崖からあるのかう。

カドを眺めながら歩いているうちに、街の中心のような場所に辿り着く

ここに広々とした場所の中心には、今では徳島の市街の盛り上がりたところと云うのである。かつては賑わう場所であったが、ここでは鳥羽のようにひびくところはない。この所はまた、江戸の谷風のようである場所の所には前記と少し違つて、一始点である。朝から晩まで、数々の客の出入りが行なはれ、街の中心といふやうな場所である。昔はこれに赤い三角の標があり、この人が旅費として入らなされたといふ。この辺りは赤い煉瓦の地に身が滑つたものがたくさんある。

駅を横切り、反対側へ向かう。

北門口よりタリノ
さつまくまへ、たとひそこは打つて變つて殺風景である。一瞬で全く別のところへ來てしまつたか、とたゞさう錯覚に陥る。そこには一本の大きな塔が天を覆つてゐる。一本の塔の周圍が空が見え、細く真つぐ延びる道には寂しさを感ずる。一本の塔がこの全道を支配しているように感ずる。その脇には、ほんの少しの小さな塊がいくつあり、人々が行き交つてゐる。

何もない殺風景な細い道を歩きたらずに進んで行くところ、周りの雰圍氣とは違ふものが見えてくる。

（金平の強い口調で）
水平の強い口リットにつつまれた建物である。窓は少なく、開口は、丸みを帯びてゐる。ひさしが窓から少し出ていて不思慮な感じである。

かう。

この通りは先ほどの反対側の斜めに延びる通りに良く似ているのだが、鋭角で切り取られた孤島がひとつだけ存在する。また、鋭角が切り取られた低いので眺めあたり、人々が揺蕩うようになっている。つまり、この通りは反対側の斜めの道と違つて、ガラスで覆われているものが多く存在するからだ。

少し大きな道とを真つと直ぐに進み、曲がると、気になるものが雇われている。

〈同じデザインに住居群〉

いくつもの同じデザインのものがずっと並行している。同じデザインとい

この大きな通りを中心に向かって歩いて行くところ、森のようなものが見えてくる。

（二橋を構内）

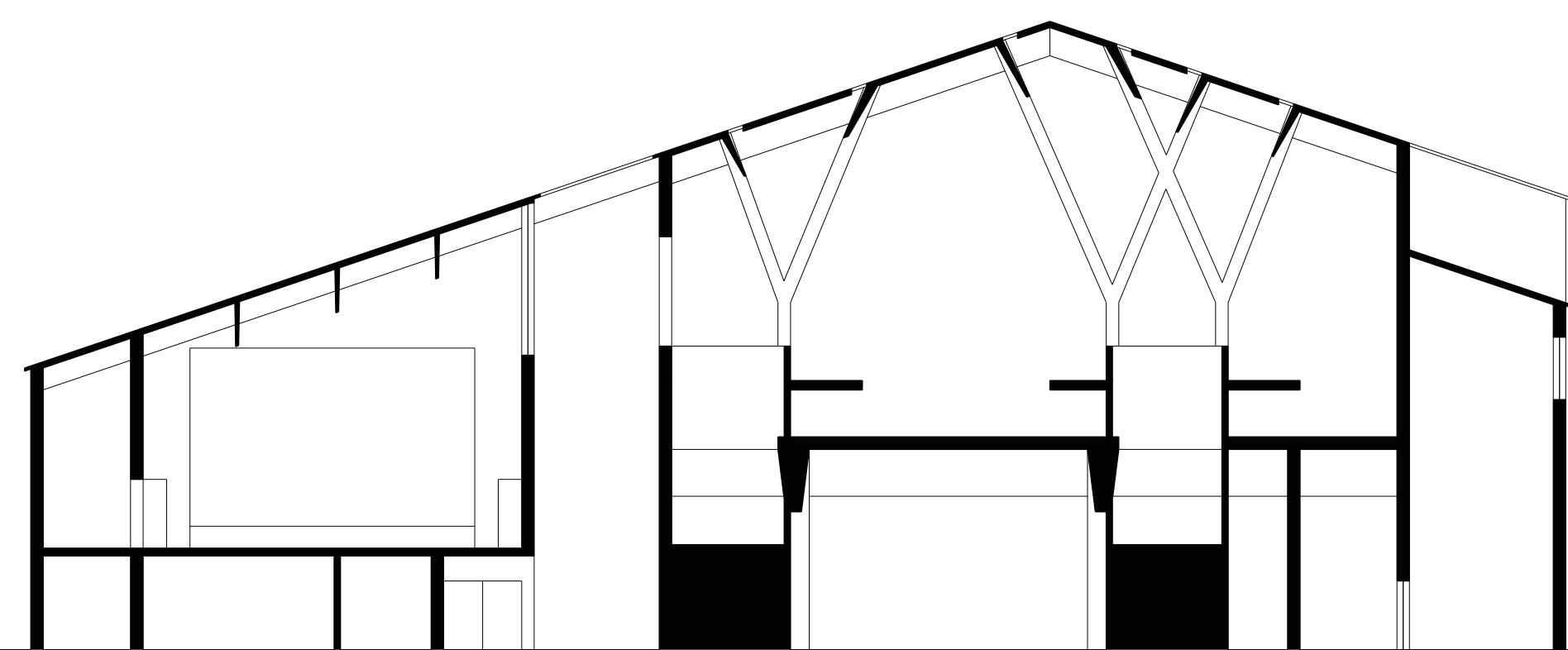
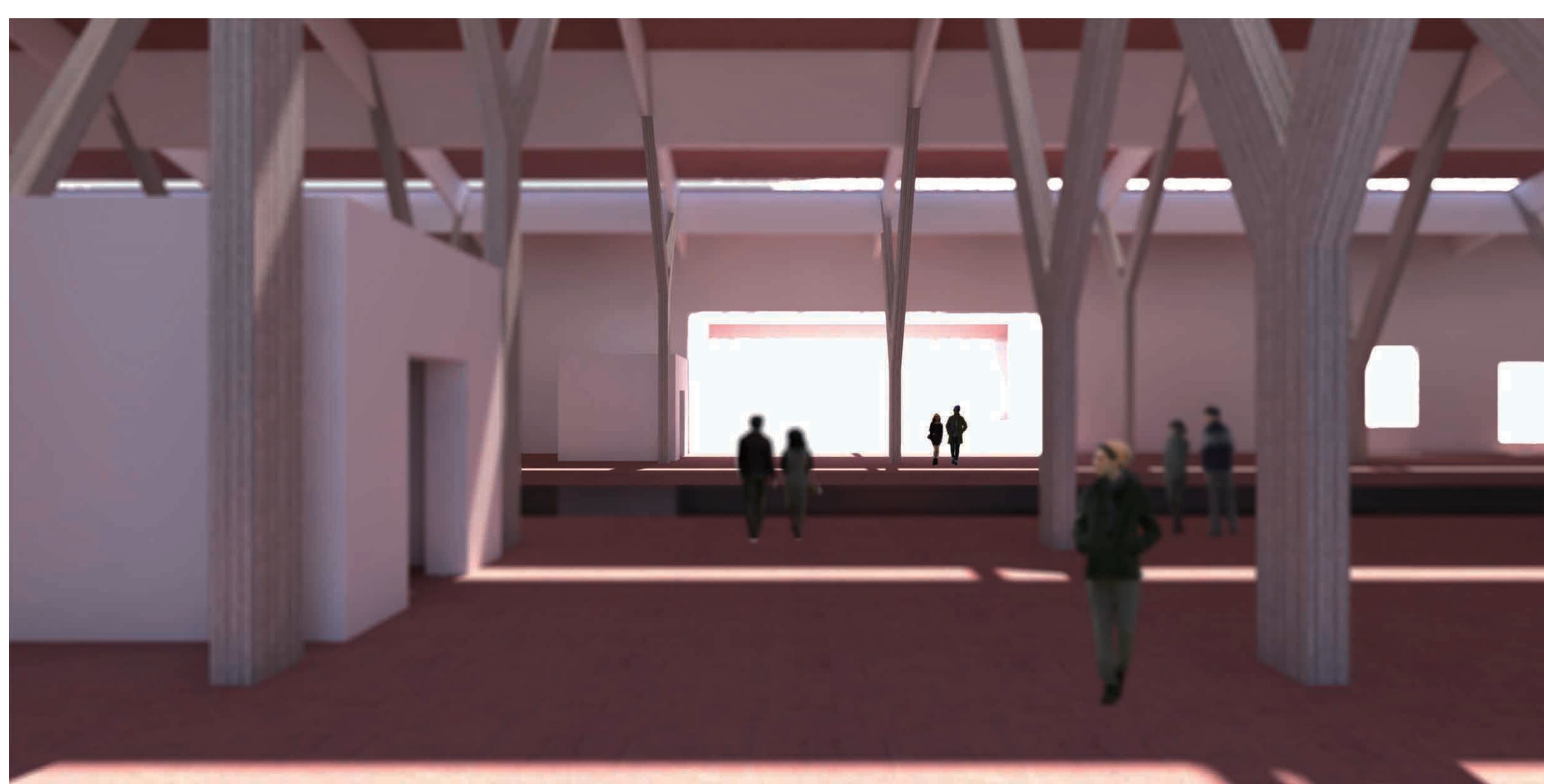
生い茂っている。まるで森のようである。周りから隔離されたような空間でありながら、小さい子供か、お年寄りまみんなが集まっている。森のなかひびくつそりと、いくつかの壁が立っている。壁が莊嚴な空間気を放っている。まわりとは違う時間が流れているように、心安らくここである。

「今大通り」
 真っ直ぐな広い通りである。この通りは一年を通して季節を感じることができる。通りの両脇は、緑陰に並んだ木々の其の異なる二種類の木々に覆われている。この道を越える南側のものはほとんど、空が広がる。木々の隙間からチラチラと光が透れる。人々は足ででるから賑わっている。この通りの終点にはかつて三角の赤い屋根が見えていた。細い通りに入って行く。

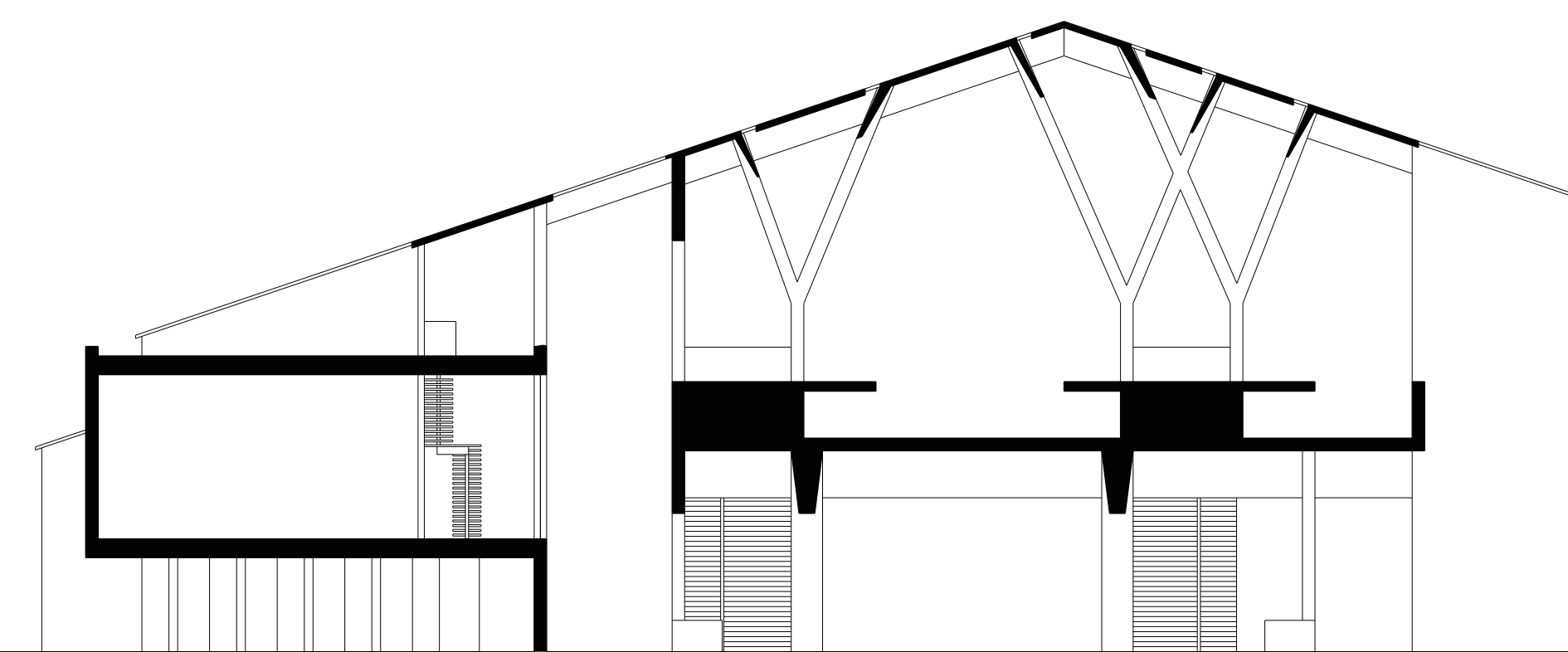
人のための小
プラシコ通

るが、それぞれ個性的である。通りの上にはフレームが架けられていて、そこから切取り
 られた窓が見える。奥に入っていくと小さな広場のような空間がある。座る場所も設けて
 あり、人々を引き込んでいる。そこにはいろいろなものが仕出されていて、賑やかな雰囲気
 が醸し出している。なんだかワクワクさせられる通りである。

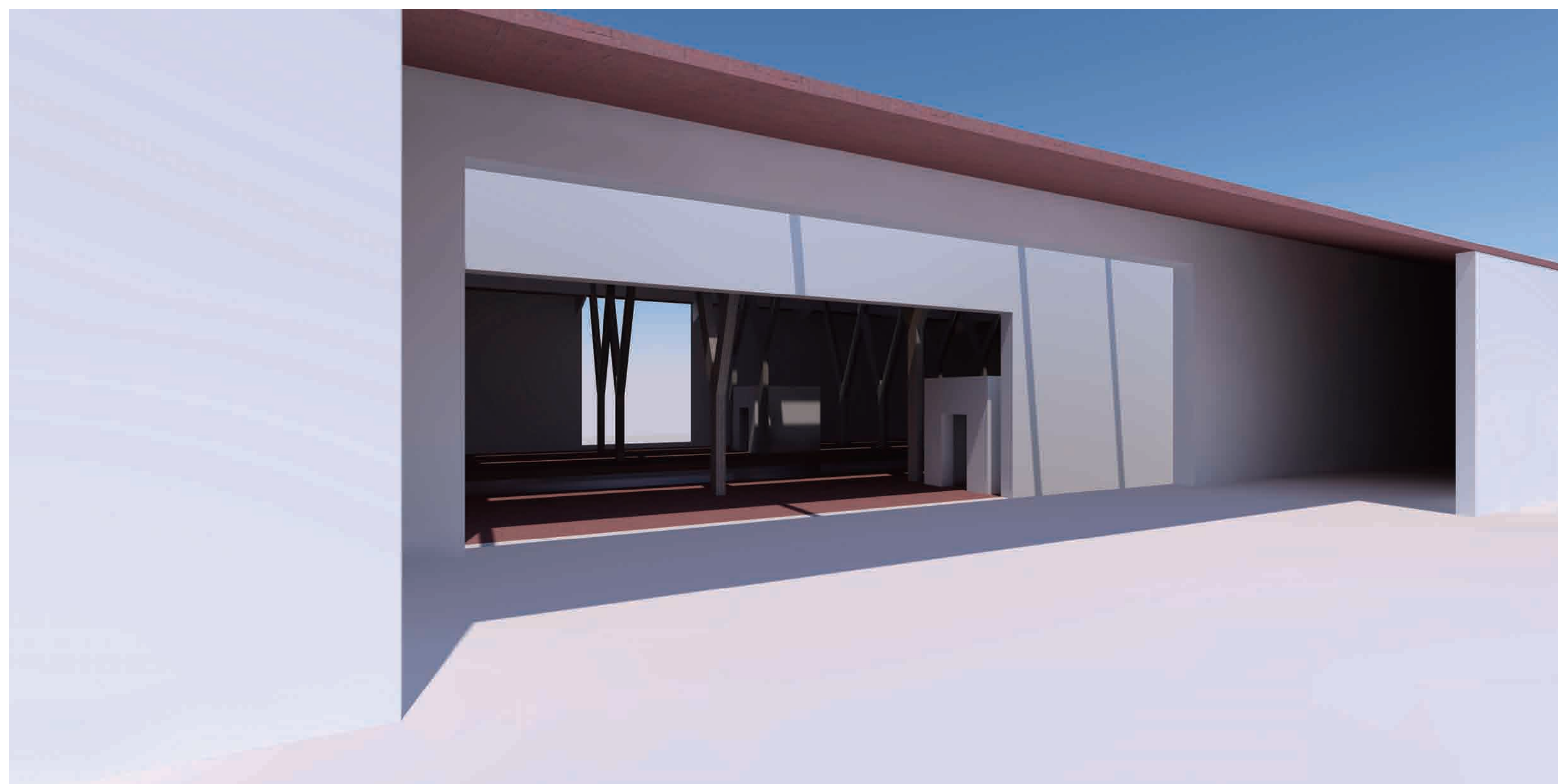
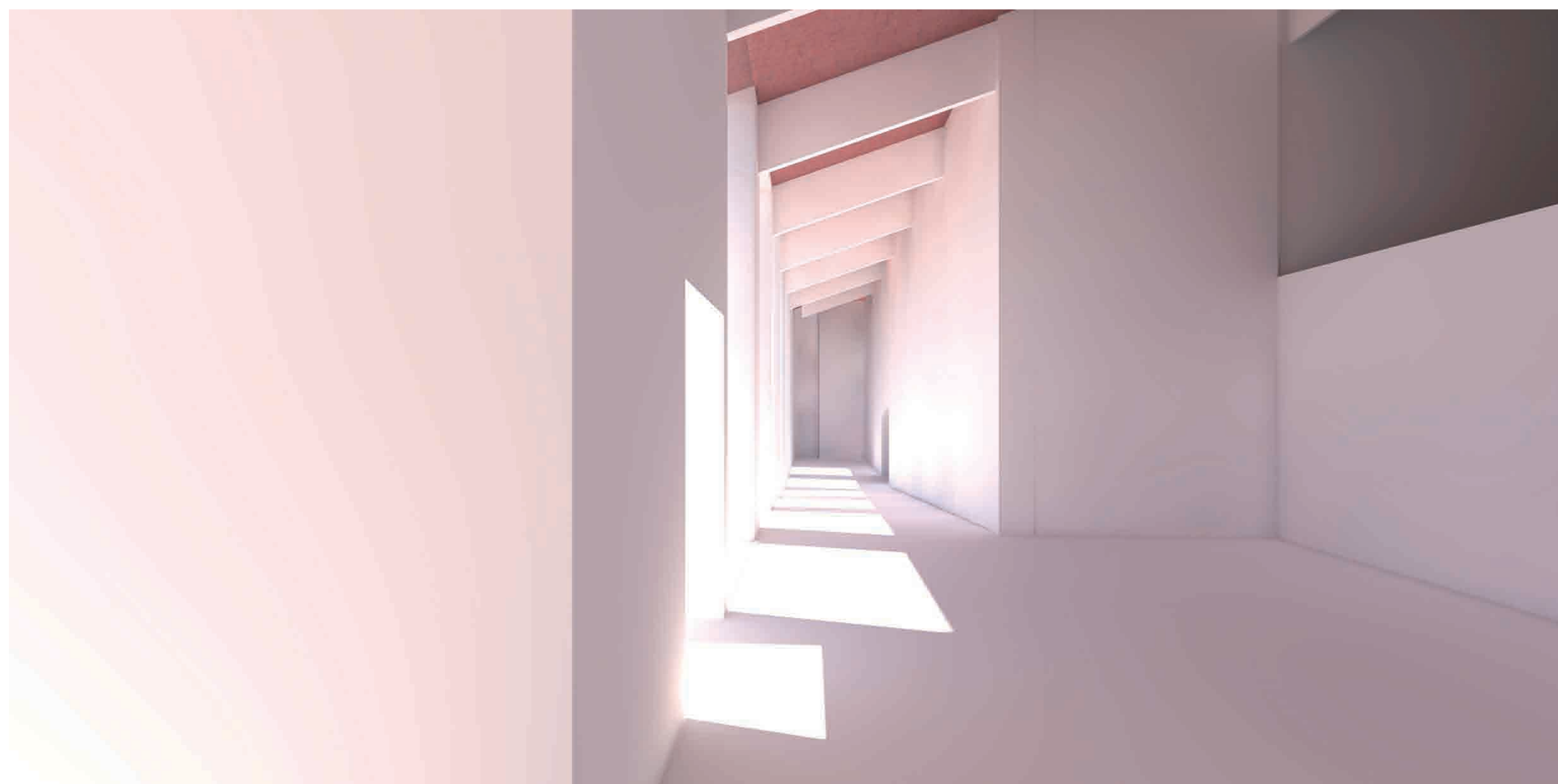
賑やかな雰囲気をあとにして、駅に向かう。

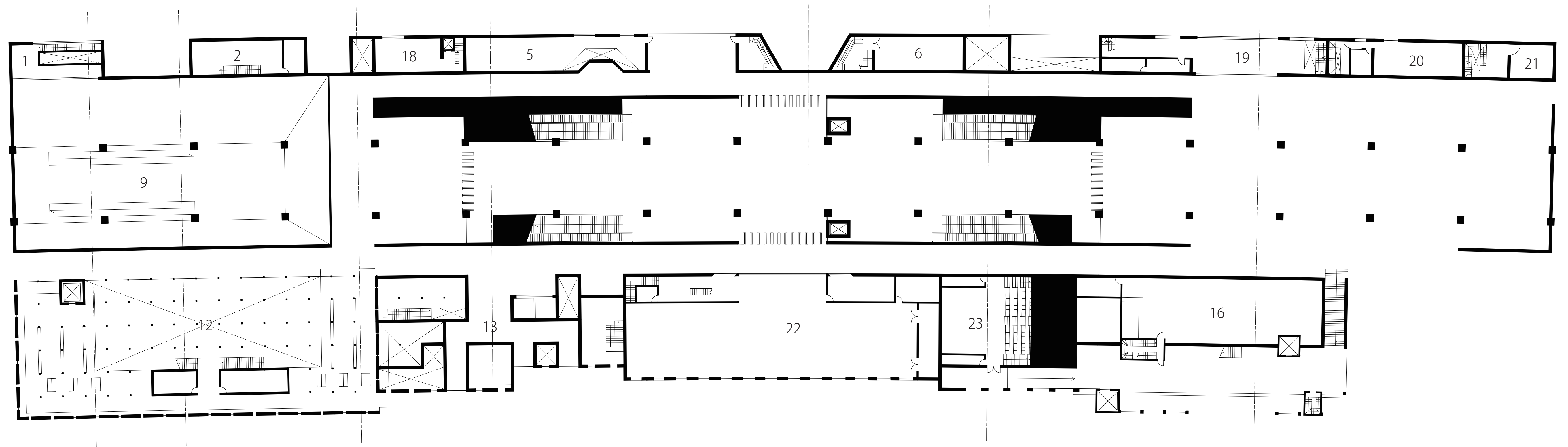


B-B' SECTION S=1 : 200

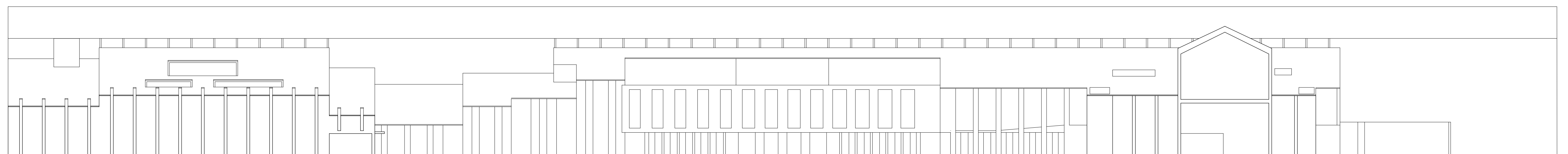


C-C' SECTION S=1 : 200

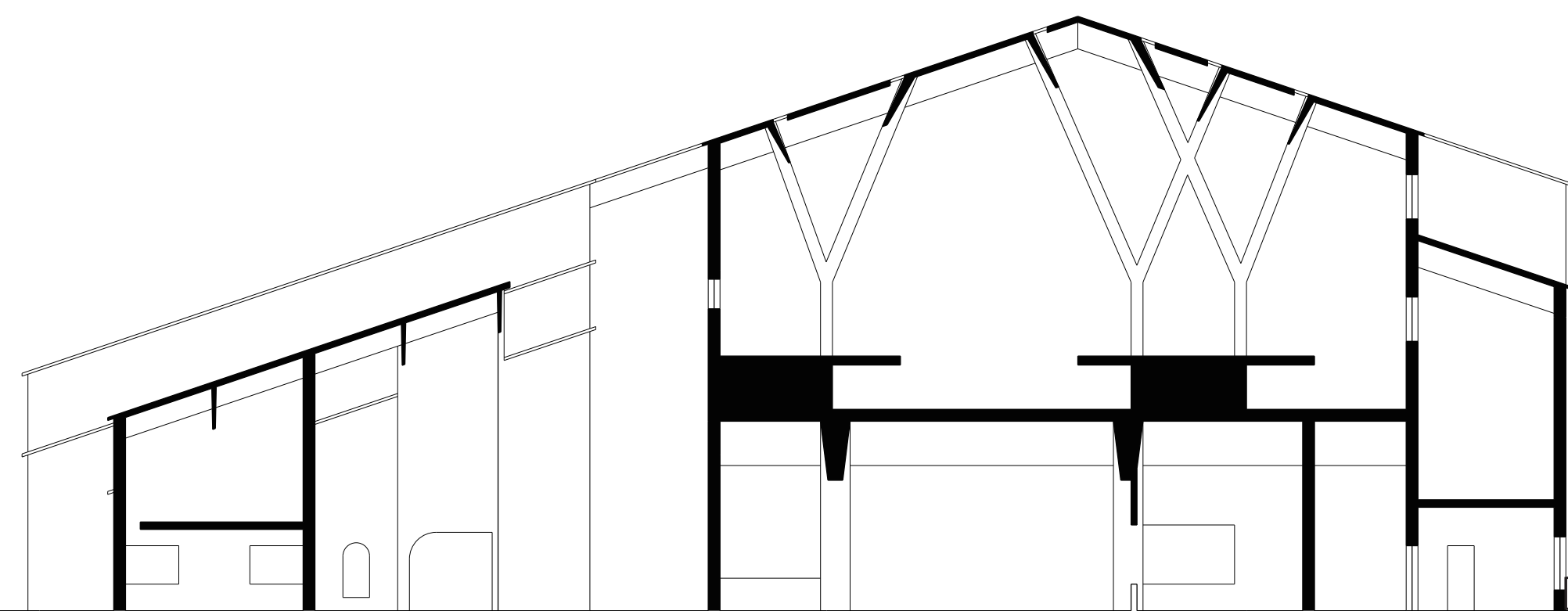
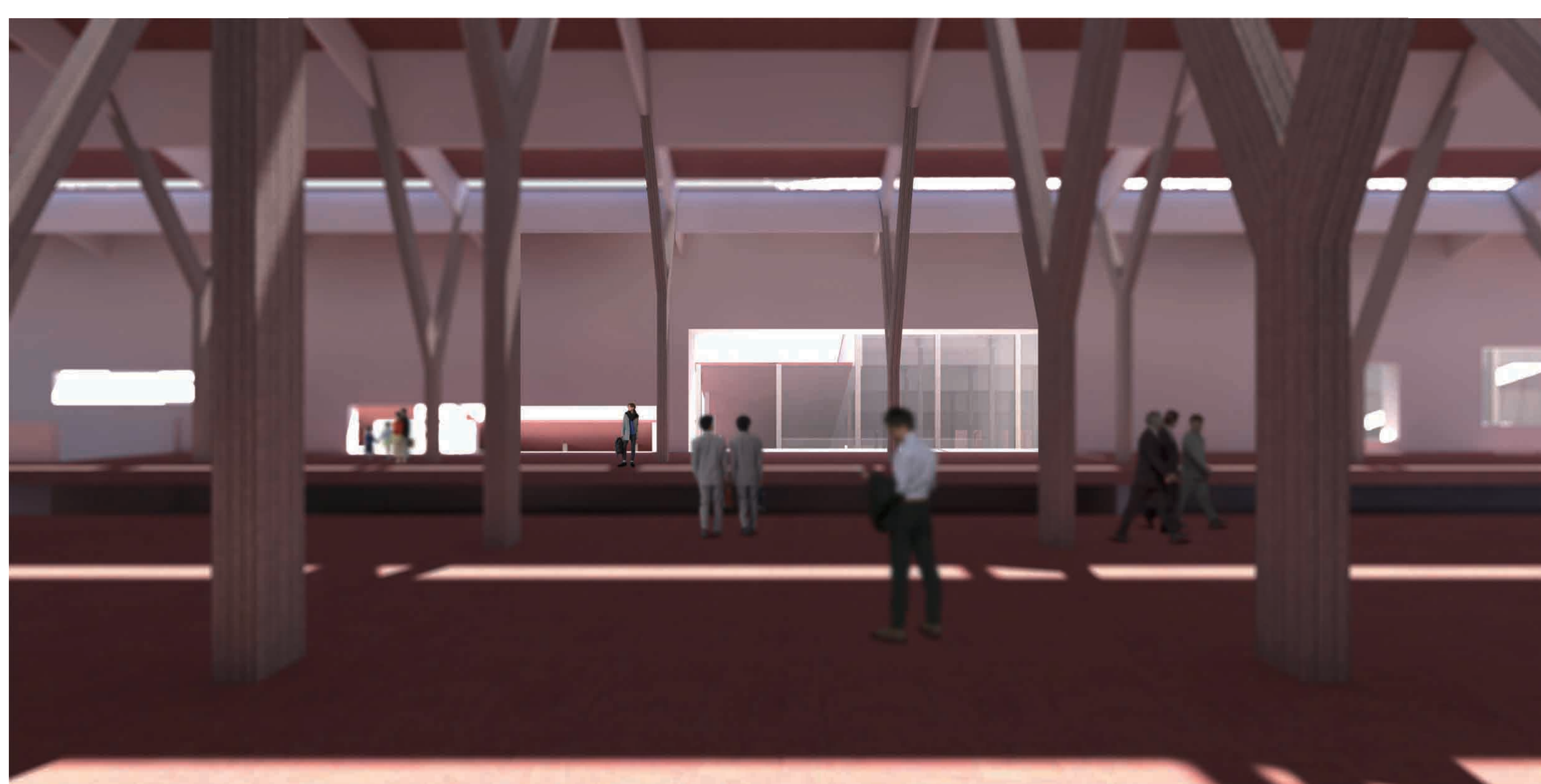




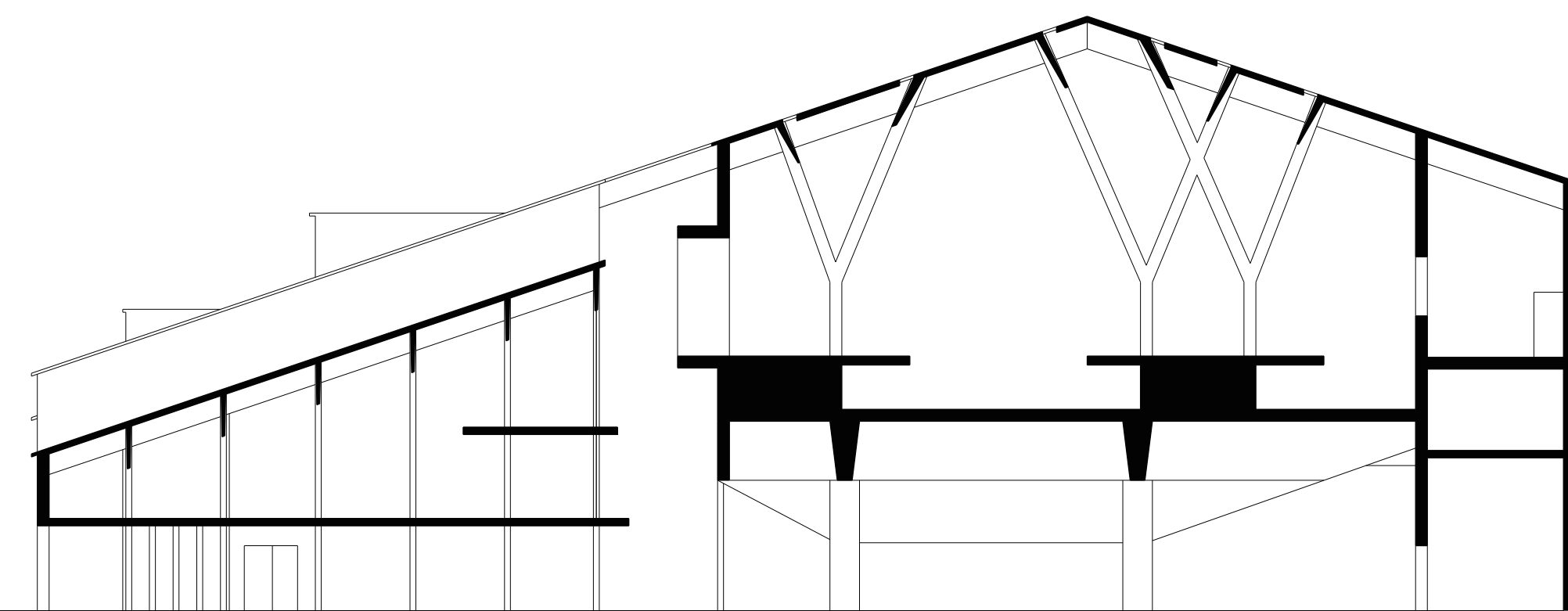
2F PLAN S=1 : 300



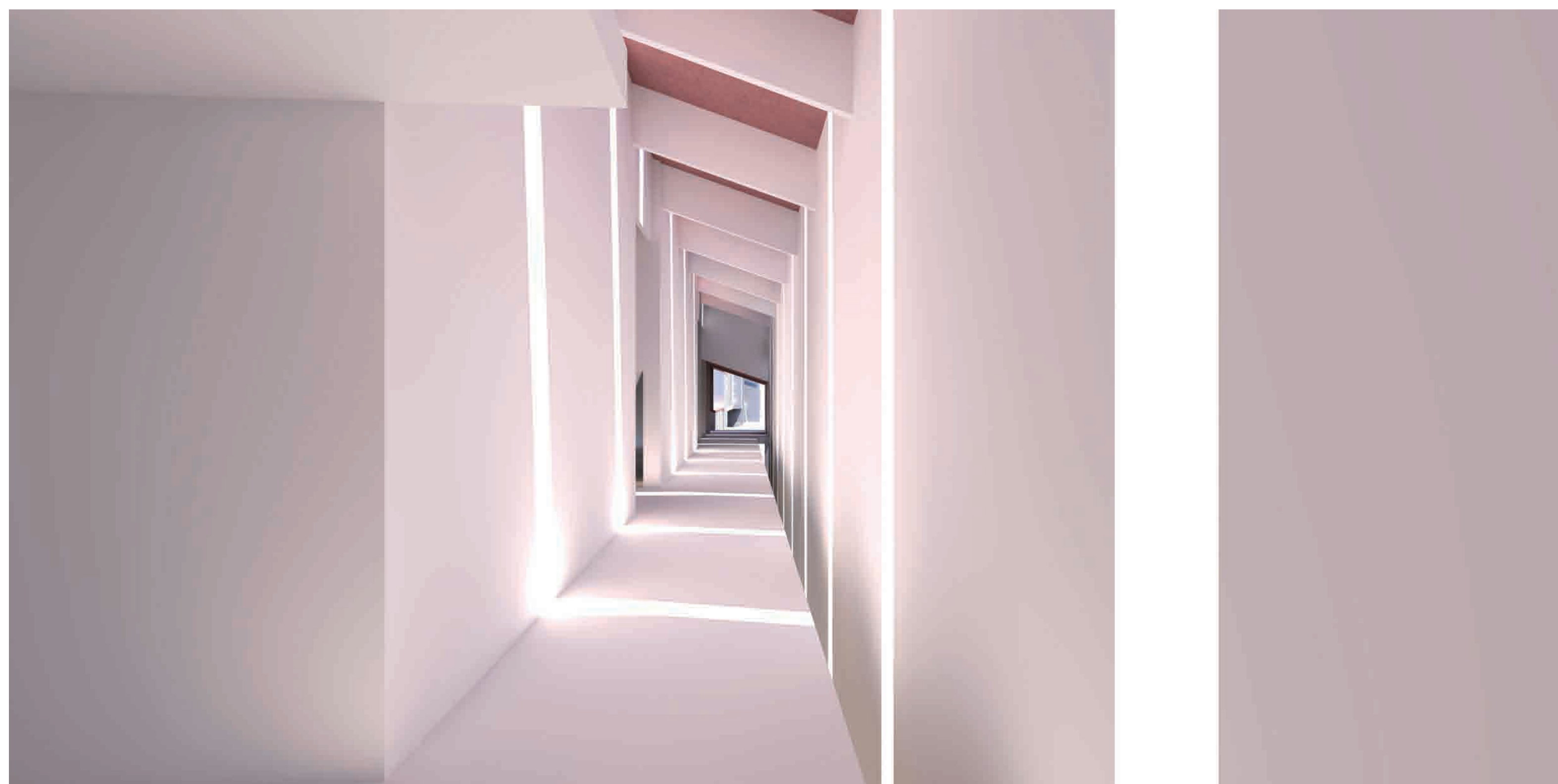
SOUTH ELEVATION S=1 : 300

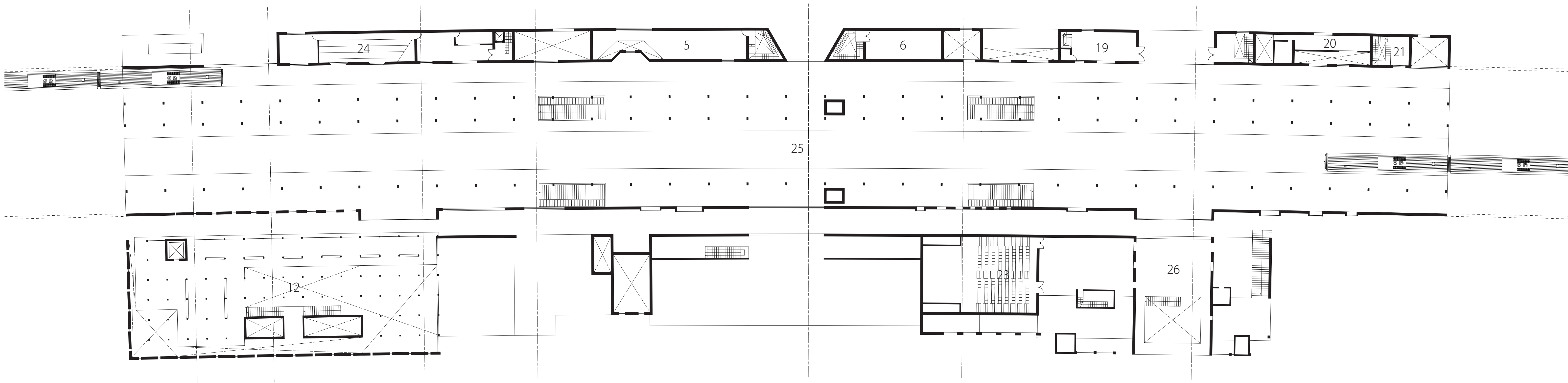


D-D' SECTION S=1 : 200



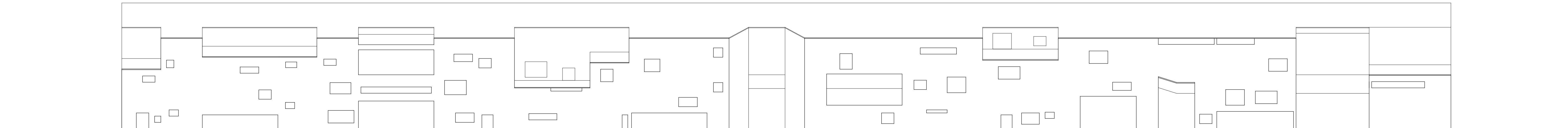
E-E' SECTION S=1 : 200





3F PLAN S=1 : 300

1. 駐輪管理室 2. 書店 3. 倉庫 4. 生花店 5. ギャラリー 6. アトリエ 7. 八百屋 8. 飲食店 9. 駐輪場 10. ラチ内コンコース 11. 広場 (マーケット) 12. 図書館 13. 託児所 14. タクシープール
15. 大ホールエントランス 16. 喫茶店 17. 市役所出張所 18. 貸ホール 19. カフェ 20. ライブハウス 21. スタジオ 22. 運動場 23. 大ホール 24. 小ホール 25. プラットホーム 26. 展望台



NORTH ELEVATION S=1 : 300

